

## 聖霊の火

ルカ 12 章 49-53 節

**12:49 「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである。その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか」**

イスラエルには終末は火の中に現れるという黙示思想がひろまっていた。神は火をもって世界を裁き、罪を焼き滅ぼし、それによって神の民＝イスラエルを清められるという終末信仰です。

この火による終末を告知した最後の預言者は洗礼者ヨハネです。彼の預言は、「わたしは水で洗礼するが、わたしの後に来られる方は火によって洗礼される」という内容だったと考えられます。

イエスは自分の使命が、終末をもたらす神の裁きの火を世界に投ずることであると自覚して、「わたしが来たのは、地上に火を投ずるためである」と語ります。しかし、その火は黙示思想が描く世界を焼き尽くす火ではなく、世界を変革変容させる聖霊の火であることをイエスは見抜いています。聖霊の火がイエス自身の中で熱く燃えて「神の支配」の現実を体験させているように、その聖霊の火が世の人々の中に燃えて、「神の支配」という現実が地上に実現することを願います。それが「その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか」という、イエスのことばには珍しい願望を現す形で語っています。

イエスが投げ込もうとしている「火」は「裁きの火」ではありません。比喻としての「聖霊の火」です。

イエス以前には神が人を選びご自身の霊を注ぎました。神の霊は預言者や王をとおして、モーセや、エリヤや、ダビデ、ソロモンをとおして地上に現れました。イエスは特別に選ばれたエリートに神の霊が注がれるのではなく、

世の人々、つまり、神を信じる人には誰にでも神の霊が注がれる時代が到来したことを告げました。

「わたしが来たのは義人を招くためではなく、罪人を招くためである」  
罪人を招き、神の霊を授け、神の霊の働きに参加させるためにイエスは地上にやってきたのです。

**12:50** しかし、わたしには受けねばならない洗礼がある。それが終わるまで、わたしはどんなに苦しむことだろう。

そのためにはイエス自身が苦しみの洗礼を受けなければなりませんでした。イエスは、すべての人のために罪の贖いの業を成し遂げ、栄光を受けたのち、御自分のもとに来る者に霊を与えることができるのです。

復活によって栄光を受けたイエスが、信じる者に霊を注がれる業を、マルコは「聖霊の洗礼」と呼びました。ルカは、信じて求める者に聖霊が与えられることを「父の約束」と呼びました。ヨハネは、イエスが地上を去られた後に与えられる聖霊を、「別の弁護者」と呼びました。呼び方は違いますが、福音書はみな、イエスが来られたのは神の霊が注がれるための道備えだとしています。

**12:51** あなたがたは、わたしが地上に平和をもたらすために来たと思うのか。そうではない。言うておくが、むしろ分裂だ。

聖霊を受けた者は、新しくされた者であり、今までの自分ではない。だから従来のままの世間の人たち、そして家族とも分裂する、それは避けられない、という意味であり論理、理屈です。しかし、この聖書箇所「分裂」は家族を大事にしない、社会に対して対立的だ、協調性がないなど、キリスト教は非難をされ続けています。

キリスト教の長い歴史の中には栄光もあり暗黒もありで、批判的に乗り越え

る課題も多数あります。この「分裂」もその課題のひとつです。

どのような宗教にも「個人の終わり、世界の終わり」についての教えがあります。そして人間の救いはそれらの終わりに対してどのようにするのかで決まると解き明かします。福音書はその終わりに関して、ユダヤ教の黙示思想、ヘブライの終末思想をベースに語られています。しかし、きょうのテキストではイエスは黙示としての裁きの火ではなく、聖霊の火を語りました。そしてこう願いました。

### **「その火が既に燃えていたらと、どんなに願っていることか」**

イエスは決して裁きの火で世界が焼き尽くされることを願っているのではなく、聖霊の火が一人ひとりの内に燃えていることを願っています。わたしたちは感謝の気持ちでそのイエスの願いに答えていきましょう。そしてそのために今できることを始めましょう。